

CONTENTS

文化の交差点 青木 保・文化庁長官対談 第13回 ゲスト 小倉和夫さん●国際交流基金理事長

世界と向き合う	4
長官コラム 青木保のカフェ・アオキ	8

特集 文化的景観保護の新たな取組

報告

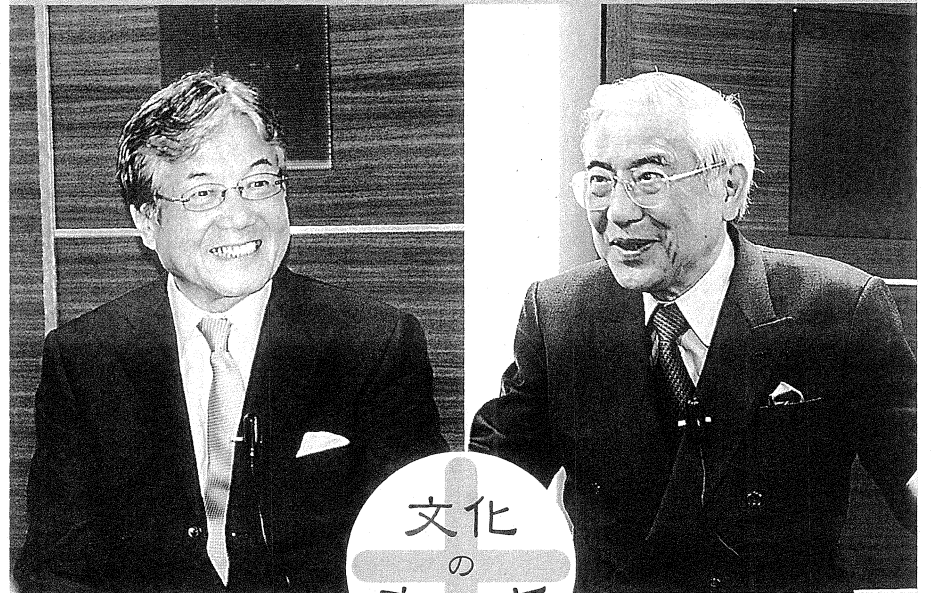
採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する 文化的景観の保護に関する調査研究（中間報告概要）	文化財部記念物課・12
--	-------------

連 載

いきいきミュージアム 美術館・博物館事業レポート 77 高崎市タワー美術館（群馬県）	24	広げよう「文化力」の輪！ 29 「丸の内元氣文化旬間 2008」を終えて	32
芸術文化の風 41 アート・アウトノミー・ネットワーク（AAN） 自発的なアート活動をつなぐ・あつめる・かんがえる （嘉藤笑子）	25	こどもの文化体験 17 森・水・ふるさと、子ども落語の学校（宮崎県椎葉村）	33
著作権Q&A 「著作権なるほど質問箱」から 41 広報と著作権①	26	日本の伝統美と技を守る人々 選定保存技術保存団体編 9 日本伝統瓦技術保存会（屋根瓦葺（本瓦葺））	34
暮らしの中の言葉 5 辞書にないけど「正しい」言葉	27	国宝・重要文化財をもっと楽しむ方法 文化財鑑賞の手引き 65 画家とコレクション	35
伝建地区を見守る人々 伝建歳時記 53 浜崎の祭りを支える浜崎気質（山口県萩市）	28	祭り歳時記 伝承を支える人々 29 大日向の火とぼし（群馬県南牧村）	36
世界遺産講座 3 世界遺産の概念	30	文化交流使の活動報告 45 世界中で将棋を（将棋棋士・本間 博）	37
		新進芸術家在外研修体験談 5 名匠の世界をかいま見て（撮影・大澤佳子）	38

今月の
表紙
東鴨地蔵通り商店街（東京都豊島区）

文化庁ニュース	39
イベント案内	42
新国立劇場スポットライト	45
9月の国立劇場	46
芸術文化振興基金ニュース	47
題字デザイン 桑山弥三郎	



文化の交差点

青木 保・文化庁長官対談

第13回ゲスト 小倉和夫さん（国際交流基金理事長）

世界と向き合う 国際文化交流の可能性

韓国の対日感情の実体験

青木 小倉和夫さんは、ベトナム、韓国、フランスでの大使を歴任され、現在は国際交流基金の理事長をされています。日本の外交、特に文化交流において、まさに第一線で指揮をとっておられる方です。

まず大使時代のお話からおうかがいますが、小倉理事長は韓国やベトナムなど、近いけれどある面では難しい国の大使を歴任され、またヨーロッパでのご経験もあるわけですが、大使としてはどこが一番やりがいがあったのでしょうか。

小倉 一番難しいところが一番やりがいがあるという意味では、韓国で、アジア経済危機があり、金大中大統領が登場するときでしたから、そういう意味ではやりがいがあったわけですね。

私が赴任した時点ではまだ金泳三政権時代で、政権に勤めている人はゴルフ厳禁でした。政府の役人がしないのに、私がやるのはちょっとまずいのではないかと、ということ、あまり好きではなかったこともありますが、やりませんでした。

た。金大中政権になってしばらくたった、いいことになって、それから韓国ではまた皆がゴルフをやり出しました。

青木 金大中さんは対日外交でもオープンにおやりになって、日本の文化の紹介も緩和されたんですね。

小倉 姿勢としては緩和はしたけれども、大統領が言っても、文化省関係者はじめ世論はすぐにはついてきません。もちろん全体の方針としては文化開放と言っていました、実際やり出しますと、いわゆる大衆文化については、なかなか大変でした。

青木 ダメなんですか。

小倉 一部開放はできましたが、全面開放というのはダメでした。当時はですね。

青木 韓国の対日観には、やはりなかなか難しいことが多いでしょう。

小倉 一番驚いたのは私の女房です。大使公邸にいろいろな方をお招きするわけですね。大臣クラスの方をお招きしますと、まず開口一番、私のおやじは日本軍に非常にいじめられたとか、そういう話を五分ぐらいいされるのです。こちらはご招待しているし、向こうも公の地位を

持った方ですから、こちらも黙ってお聞きするより仕方がないわけですが、うちの女房はびっくりしましてね。大体ひとのうちに呼ばれて、いきなりおまえらはけしからんと五分間やるのはどういこうとかと。私は、これは一種のあいさつと思ってくれと。日本人と会ったら、とにかくひとこと言うということなのだから……（笑）。

青木 ごあいさつを（笑）。

前に理事長から、日本チームが韓国でサッカーの試合をしたときのことに付いて、大変興味深いお話をお聞きしました。

小倉 日本のサッカーチームが韓国に来て、対抗試合を行ったときのことで。そのときに日本側の応援席に韓国の高校の制服を着た女子学生がいるんですね。「ここは日本のほうで、韓国側の応援席ではないよ」と言ったら、「いやいや、私は日本チームを応援する」と。「私は韓国人だけど、あそこにいる中田がとていいので、彼がいるところはどこであらうと応援するんです」という話だったのです。

青木 私も理事長のご意見に賛成ですが、実際には日本文化というのは、なかなか見えにくい面があります。例えば和服を着れば日本文化になるのか、あるいは和食風なものを食べればいいのかと言いつつ切りがないところもあるのでないでしょうか。



小倉 最近、「日本文化の発信」がよく

るところとは、国の成り立ちが違いますが、政府の方々にもぜひお願いしたいのは、たまには着物をきていただくとか、何か日本らしさを、と。例えば夕食会です。私は鹿鳴館思想だと言っているのですが、晩餐会の食事、確かに日本食は三〇人ぐらいしか出せませんから大変ですが、その中でも、シャンパンで乾杯しないで、せめて日本酒で乾杯するとか。いろいろ工夫のしようがあると思うのです。音楽も、何もベートーベンやモーツァルトばかりやる必要はなく、日本の伝統音楽もあるのでは……。

小倉 それは確かに、非常に難しい問題です。しかし、相撲とかおすしもそうですし、着物でもいいのですけど、何となくそれを見れば日本らしさのシンボルになるようなものを日本人が大切にしている気持ちが必要です。

青木 音楽でもそうです。CDショップの「邦楽」と書いてあるところへ行きますと、全部日本人のポップミュージックです。昔の伝統の音楽は一つもないです。

青木 見つけるのが難しいし、どういう演奏家がいって何を演奏していただけるのか

もなかなかわからない。

小倉 なぜ日本音楽などと申し上げるかというと、例えばオペラの「蝶々夫人」のメロディーには、私の計算によると日本の歌が、「宮さん宮さん」とか、「越後獅子」とか、六つあります。ところが、おそらくあのオペラを知らなくなっている日本人の方で、(あそこ)に日本の音楽が入っているなとわかる人はほとんどいないと思う。というのは、「越後獅子」を聞いたことがない人も多いので……。

青木 そうですね。重要なお指摘だと思います。それに日本の伝統音楽を聴きま

すと、音階が違いますね。普通日本人は小学生のときからドレミで育っているの

で。日本の伝統音楽だけじゃなくアジア

の音楽を聴きますと、初め少し違和感を

覚えるんです。小さいときからずっと伝

統音楽やその音階に親しむ機会があれば、音に対する違和感がなくて、そのよ

さがわかるのではないかと思います。こ

日本人に対してそういうふうに通じる世帯が生まれたということ、韓国も変わったというか、新しい世帯に希望が持てるという気がしました。

小倉 私は「国際」というのは、いさゝか時代遅れだと思います。「交流」という言葉も実は時代遅れかもしれません。なぜかといいますと、「国際」というのはインターナショナルです。国という主体があつて、国と国との間という意味です。こういうコンセプトは、政治や安全保障の世界ではあると思いますが、文化の世界では果たしていいかどうか。文化庁は国の機関ですから、国際というのの意味があると思います。しかし、ファンデーションというか、私たちのような政府とはちよつと違うところになりますと、「国際」という言葉がいいかどうかもう一遍考え直す必要があると。「交流」という言葉も、実は私、こだわっておりますのは、「交わつて流れる」ですから、AとBが交流する。つまり、自分のものを向こうへ持つていって、向こうのものがこつちへ来るという考え方ですけど、それは既にやや古い考え方で、国境を外して一緒に一つの文化を育てていくといいますが、刺激を与え合うとか、そのように考えないといけない時代です。

日本を理解してもらつたために重要なことは

青木 フランスの文化外交は、世界的にも評価が高く称揚されていますが、フランス大使をなさった理事長から見てもどういふふうにお感じでしょうか。

小倉 フランスはすごいんです。要するに文化に対する考え方、国の根本が文化だということですから。

ただ、最近問題になっているのは「地方語」の問題です。フランスというのはフランス語でもっている国です。民族も違う、歴史も違う、いろんな人が一緒になつて、フランス語というフランス文化で国をつくっているのですが、そこで伝統的な地方の言語、例えばブルトン語をどうするかという問題が起こっています。しかし、そういう問題が起こること自体、いかにフランスが言葉を大切に、文化を大切にしているかの証拠といえましょう。

日本は日本語や日本文化が日本をつくっていると思われているのかどうかです。中国のように諸民族が入り乱れてい

おぐら・かずお 東京都出身。昭和13年生まれ。東京大学法学部卒業後、外務省に入省し、アジア局北東アジア課長、OECD日本代表部参事官、文化交流部長、経済局長、外務審議官、また、ベトナム・韓国・フランスの3カ国で大使を歴任。在任中には総理府平和協力法準備室長、東京大学客員教授も務めた。退官後は青山学院大学国際政治経済学部国際政治経済学科教授、平成16年7月には同大学特別招聘教授の称号を受ける。主な著書に『日米経済摩擦』(日本経済新聞社)、『中国の威信 日本の矜持』(日本公論新社)、『吉田茂の自問』(藤原書店)などがある。『パリの周恩来』(中公叢書)で吉田茂賞受賞。



いわれていて、もちろん私たちの考えを外に知らせていくために発信は大事ですが、それも受信の能力がなければ、受信できないわけです。外国の方、日本から発信した際の受信能力を高めておくことが、まず非常に大事です。

どうするかというと、外国における日本に対する関心を高める。日本語教育とか、日本研究とか、日本の映画をもっと観せる。関心を高めるようなこと、あるいは日本に対する基礎的な知識とか、そういう土壌の上にうまく植えていかないと、いけないと思っています。

青木 日本語の普及という点で、一番問題点となるのはどういうところですか。フランス語は世界中にアリアンス・フランセーズみたいな組織があつて、日本だけでも数か所に拠点があります。国際交流基金はどうでしょう。

小倉 やつと拠点は三〇近くになりました。

青木 この間、フランスの関係者から聞いたのですが、今、一番脅威なのは、中国が孔子学院というのを二〇〇四年につくって、中国語普及と中国語文化発信の

についてはどのように見ておられますか。

小倉 いまだにみんなアメリカへ留学しますね。しかし、行った人がみんな親米になるかというと、そうでもないと思うんです。アメリカという社会にある種の失望を感じる人も少なくないと思うのです。

日本に留学する人が日本が好きになる必要は必ずしもない。ただ、正確に日本を知ってもらいたいと思うのです。その上で、嫌いなところは嫌い、いいところはいいと思ってくればいいと思うのです。

私が今、一番問題に思っておりますのは、中国における日本に対する普通の人の対日感情と比較して、中国に進出している日本企業に勤めている人の感情が必ずしもよくないという点です。この間、ある人の話を聞いたのですが、その人は日本の企業に勤めている女性ですが、今まで、「おまえは何で日本の企業なんか勤めるんだ」と言われて、親戚、友人から冷たい目で見られてきた。ところが、今度、四川省地震が起ったとき

拠点づくりを世界で行っている。アジアやアフリカなどでこれまでアリアンス・フランセーズだったのが、孔子学院に移っていく人が多いというんです。どうして中国はこういう取組を始めたんでしょうか。

小倉 一つは、中国自身の社会が今、重大な危機に直面しているせいだと思います。今、豊かになってきた中国の社会が、これから社会倫理をどうするかといったときに、儒教倫理が一つの支えになるという考えではないでしょうか。

孔子学院というのは、まさに中国の自らの生きざまの中で、儒教をどれだけ復権していくか、それと結びついている。もちろんそれは中国に対する理解を増やしたり、中国の力を外に出したりといったような動機もたくさんありますけども、その背後にもっと根本的な動機も絡んでいるように思えます。

社会貢献が重要

青木 日本で今、留学生の三〇万人計画がありますが、受け入れるだけでなく日本からも出すということですが、留学生

に、日本が救援隊を出したり、小学校を建て直すことに努力してくれたり、また彼女の勤めている会社も義捐金を出したそうです。そこで、彼女はやつと、「いや、日本の企業はこういういいことをしているんだ」と誇りに思うようになった。しかし、それまで非常につまらなかつたというのです。それから、韓国で日本語を教えている先生方、そうした方々には社会の目が相当厳しいです。日本語を教えた日本研究に従事する人々を見る社会の目が変わるようにしてはイケないと思います。

とりあえず一番大事なことは、日本の進出企業が中国においても、韓国においても、もつと社会貢献活動をすべきだと思います。EUとか、アメリカの商工会議所が中国で、社会貢献活動専門の人をわざわざ雇っているぐらいですから。

青木 それをすることが、プラスになってはね返ってくる、経済関係でも。

小倉 大企業の方は、最近、社会貢献部をおつくりになって、だいぶ熱心なところもあるようですけど、全体としてはまだまだですね。

青木保の

カフェ・アオキ



留学生外交

政府の海外からの「留学生三〇万人計画」、それに付随して受け入れるだけでなく外国への留学生も三〇万人に増やす計画も立案されているとの報道があつたが、これは積極的にぜひ実現してほしい計画である。グローバル化の時代にあつては留学生の多さは国の国際的な地位にも影響する。多くの留学生の目指す国や地域は世界を主導し、国際社会で信頼を得る。

アメリカの世界における地位は、魅力的な大学や研究機関が多くあり世界を先導する研究がなされていて世界中から留学生が集まることによっても支えられている。しかし、最近気になる傾向が出てきた。

少し前になるが、「インターナショナル・ヘラルド・トリビュン」紙に「外交資産の価値減少」という記事が載っていた。それによると、アメリカの学生の「アカデミック・ステップ」のための外

国留学が、最近のドル安で大変困難になっている。特に対ユーロでのドルの落ち込みは、アメリカの学生にとって人気のあるヨーロッパの大学や研究機関へ留学するのを阻んでいる。他方、外国からアメリカに留学しようとする学生にとっては九・一一以後のアメリカへの入国規制の厳しさが影響して留学生は減っている。指紋押捺と留学ビザ取得の困難と取得料の高さがその理由である。

この記事は、留学生外交は国家や国民の間に緊密な関係を創り出すのに有効な手段である。一九六〇年代にフランスとドイツ両国はその戦後和解の中核に留学生の交換を位置つけたし、八〇年代後半に始まったヨーロッパ連合加盟国間の留学生交換制度「エラスムス・プログラム」は連合体の強化に大変役に立っている。合衆国政府はビザ規制を緩めるなどの留学生受け入れがしやすくなるような措置を執り、米国へ世界を導き入れる政策を積極的になすべきだ、それは世界におけるアメリカの信頼落ち込みに対する最大の浮揚策になる、と結んでいる。こうした記事がいまアメリカの大新聞に載ることの意味は大きいと思った。日本にとっても無縁のことではもちろんない。

青木 確かに理事長がおっしゃるようなことは、日本の企業の中国など外国での活動だけでなくもっと広く重要な日本と世界との関係に関わりますね。

そこで、文化交流の大きな意味が出てくると思います。日本の文化の魅力的なところ、例えばアニメとか、マンガとかも、一二世紀の絵巻物とか、浮世絵とか、いろいろな伝統文化と関係があるので、日本の伝統的な文化的背景も理解してもらえよう文化発信をしなければと改めて考えているところです。

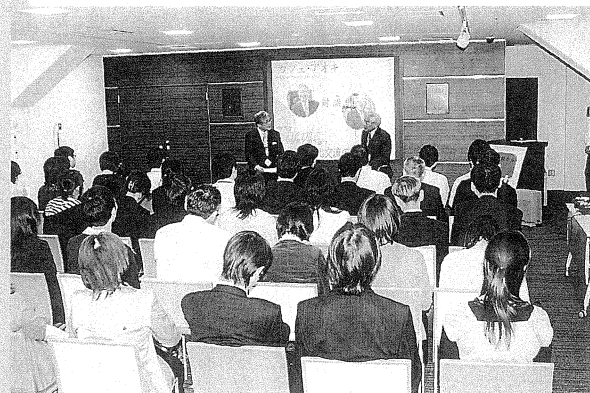
小倉 私は、文化というのは力ではない。力というのはパワーで、それは権力、経済力です。文化をお金や権力と結びつけることは、非常に危険な発想だと思います。逆に力があつて、文化が出ていくという面はあると思います。しかし、文化そのものが力だという発想は、それが何を言わんとしているかわかりませんが、むしろ文化は、力に反抗する。権力とか、金力に……

青木 むしろ中和するところがある。

小倉 ええ、中和する。例えば、政府とはまた違う人々と話をする。文化と力と

いうのは対立する側面が強いという意識を常に持ちながらやらないと、文化をもつて日本の力だ、大いにやるんだ、ソフトパワーだというのは、単純な議論ではないかと思っているのです。

青木 結局、小倉理事長と対談をする、最後は全部ひっくり返るという（笑）。「国際」は否定され、「文化交流」



は否定され、ついには文化庁の看板である「文化力」も否定された（笑）。ただし、あまり嫌な気はしない（笑）。確かに指摘の面はあると私も思います。ただ、今、中国はソフトパワー論でしょう。まさに文化も国力という見方が強く出てきたし、孔子学院がその一つの大きなシンボルかもしれませんね。

小倉 この間、韓国でセミナーがありまして、韓国の最大のソフトパワーは、日本の過去を問題とした歴史認識というものだというのでは、ちょっと困るのですよと発言しておきました。何をもつてソフトパワーと言うかは、よくみんなが考えておかないといけませんよと、ちょっと皮肉を申し上げたのです。

青木 それ、重要な点です。ただ、アメリカにしても、中国にしても、世界に対してハードパワーでくるよりは、ソフトパワーできたほうがいいと私は思っています。

小倉 それはそうですね。

青木 きょうは、本当にお忙しいところご出席くださり、また刺激に満ちたお話をありがとうございました。（丁）

◆長官対談◆
「文化の交差点」 青木保文化庁長官対談
 宮田亮平 東京藝術大学長
 「長官コラム 青木保のカフェ・アオキ」

文化財の総合的把握

◆特集◆

「文化庁提言」
 文化財を総合的に把握する必要性
 「寄稿」
 歴史文化基本構想に期待する
 「論文」
 市町村による文化財の総合的な把握の取組
 「解説」
 文化審議会文化財分科会企画調査会報告書の提言内容
 文化財の総合的把握に関する支援策

◆文化庁ニュース◆
 公開シンポジウム「障害者アート推進のために」
 文化財の新指定（美術工芸品関係―2）
 国際文化フォーラム
 「登録の日」「近代化遺産の日」と一斉公開事業のお知らせ
 など

編集後記

地域の人の生活又は生業及び当該地域の風土によって形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のために欠くことのできないものである文化的景観を保護し、活用していく動きは、平成一六年の文化財保護法の改正により制度化されました。平成二〇年六月現在、全国で七件が重要文化的景観に選定されており、今後ますますその数は増えていくことが予想されます。棚田や里山といった農林水産業に関連する文化的景観だけではなく、都市や鉱

◆連載◆

「いきいきミュージアム 美術館・博物館事業レポート」
 たつの市立龍野歴史文化資料館
 「芸術文化の風」
 カオスの会
 「著作権Q&A」著作権なるほど（顧問から）
 広報と著作権⑦
 「暮らしの中の言葉」
 語種から見た現代の書き言葉
 「伝建地区を見守る人々」伝建蔵時記
 佐渡市宿根木伝統的建造物群保存地区（新潟県佐渡市）
 「広げよう文化力の輪」
 伝統芸能の後継者育成
 「こどもの文化体験」
 アートの楽しさを「ちやうど」につづ
 「日本の伝統美と伝統を守る人々」
 石田勝雄 雅号 四世石田不慮・琵琶製作修理
 「国宝・重要文化財をもっと楽しむ方法」
 万年自鳴鐘にみる江戸の技術
 「祭り蔵時記 伝承をまえる人々」
 生子神社の泣き相撲
 「文化庁大使の活動報告」
 平成二〇年度文化庁文化交流使指名書交付式
 「新進芸術家在外研修体験談」
 谷中武彦・日本画家

文化庁月報 8月号（通巻 479）

平成20年8月25日印刷・発行

編集——文化庁

〒100-8959 東京都千代田区霞が関 3-2-2

発行——株式会社 ぎょうせい

本社 〒104-0061 東京都中央区銀座 7-4-12
 本部 〒167-8088 東京都杉並区荻窪 4-30-18
 電話 編集 03 (3571) 2126
 販売 03 (5349) 6666
 フリーコール 0120-953-431
 URL: http://www.gyousei.co.jp

印刷所——ぎょうせいデジタル株式会社

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価 540 円 [本体 514 円] 送料 76 円

年間購読料 6,480 円

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先

(株) ぎょうせい営業部広告課

電話 03 (5349) 6657 (ダイヤルイン)

2008 Printed in Japan ISSN 0916-9849

本誌は本文に再生紙・大豆油インキを使用しております。

美術館・博物館チケットプレゼント

今月号の展覧会等へのチケットプレゼントは、

- A 国立新美術館
 「アヴァンギャルド・チャイナ」 2組 (ペア)
 B 東京国立近代美術館工芸館
 「装飾 (デコ)」 2組 (ペア)
 C 京都国立近代美術館
 「アーツ&クラフツ展」 2組 (ペア)
 D 東京国立博物館
 「スリランカ」 2組 (ペア)

です。ご希望の方はアンケートハガキのチケット応募欄に必要事項をご記入のうえ、8月22日(金)までにご投函ください(当日消印有効)。

*チケット発送をもって当選発表にかえさせていただきます。

文化庁では、ホームページで、文化庁に関する情報を幅広く提供しています。ご意見、文化庁月報の感想などを、ホームページのご意見欄へお寄せください。

●ホームページアドレス●

http://www.bunka.go.jp